

## 自分のなかに歴史をよむ

阿部 勤也 著

筑摩書房（ちくまプリマーブックス）1988年

この本を初めて読んだのは予備校生のときです。童話で有名な「ハーメルンの笛吹き男」を歴史学的に説いた人の本だと紹介されたのがきっかけでした。さっそく読み、この本で語られている中世ヨーロッパの世界観に興味を持ったことを覚えています。

ところが、久しぶりに読んでみたところ、著書の前半の、著者の歴史学へ進むまでの箇所が記憶からすっかりと抜け落ちていたことに気付きました。著者は研究の在り方について、そして「解ることはどういうことか」について指導教授の上原専祿先生から学びます。それは、「それをやらなければ生きてゆけないテーマ」を見つけてそれを追求することと、「解るということはそれによって自分が変わるといこと」です。学問とは興味を持ち、つきつめようと考え続けることなのです。それを踏まえてもう一度読み直したとき、著者の言葉のひとつひとつに、こつこつと堅実に積み上げてきた学びの跡が見えてきました。そして、書物の中からはたしかにその時代に生きた人々の姿が立ち上がってきました（それはとても複雑で今にもつながる問題を提起しています）。

阿部謹也といえれば中世ドイツ史研究だけでなく、「世間」や「教養」をキーワードに日本社会を解き明かした知の巨人です。ですが、誰でも最初は迷い悩むことを、若き阿部青年の姿が教えてくれます。学びの道のりとその結晶である学説が、この一冊には込められています。

桐生 直代（福岡女子短期大学教員）